

パン屋、ジビエ料理に挑戦!! (9)

文 木村安兵衛

text by Yasube Kimura

いよいよ猟期が到来。まずは和歌山県の山中に入ることにしました。

こちらの猟友会の方々には常日頃から大変お世話になっており、弊社で提供しているシカやイノシシは和歌山県からの物も多いのです。

和歌山の狩猟方法は犬を山に放ち、シカやイノシシが逃げてくるであろう場所に鉄砲撃ちが待機しているというスタイルであります。

昨年はイノシシの赤ちゃんウリ坊が獲れたという相性の良い場所でもあります。初日は待てど暮らせど獣の気配はありません。石や木になったつもりで鉄砲を抱きしめ、気配を消して息を潜めて待っているのに無線からは「いないなあ」という少し頼りのない会話がプツプツと入ってきます。朝方までのわくわくした気持ちから一転、少し重苦しい雰囲気になってきます。そうなる鉄砲の冷たさが重さとなって腕にかぶさってくるのです。

そんな時カサカサとした音が耳に入ってきました。辺りを見渡すと丸々としたタヌキが何とも愛嬌のある顔をして小走りで寄ってきたのです。たまに道路で轢かれてしまったタヌキを

目撃する事はあっても山で生きている野生のタヌキは初めて見るのです。

そんなタヌキ君を微笑ましく眺めながら「タヌキ、狩猟鳥獣良し!」と確認作業を行うのでした。その刹那タヌキ君と目が合ってしまった、彼は慌てて踵を返し走り去って行くのです。鉄砲を構える間もなく走り去るタヌキ君を笑顔で見送っていると、タヌキ君が木の枝によじ登り始めたのです。

「せっかく逃げたのに何で木なんかに登っているんだ! しかもよりによってこちらから丸見えの木に! なぜ逃げない!」と心のどこかでは可哀想、早く逃げてと願いながらも体は反射的に鉄砲を構えてしまうのであります。ドン! 引き金を引くとタヌキ君は木から落ちたのであります。

可哀想なタヌキ君。でもこの毛皮でデイビークロケットの帽子を作ろう。等と考えるながら獲物の回収に行くと、先輩猟師から「ヨタヨタとしながら逃げて行ったぞ。木から落ちたことで安心しきってしまっただろ」という言葉。タヌキの死んだふりというのは本当にある事だったので。

タヌキに本当に化かされてしまった

私は当然その晩の酒の肴にされてしまいました。

「タヌキの死んだふりに騙された」「ウリ坊の次はタヌキ。どんどん獲物が小さくなっていくなあ」「最後はモグラになっちゃうんじゃない?」などとかかわれ、付いたあだ名は「ポンポコリンのしゅう」。

私のいないはずの猟で無線から「今、木村君が通ったぞ」と流れたようです。はいその通り。

目の前を通ったのは私ではなくタヌキであります。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA(米国食品医薬品局)研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社プランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2017年現在29店舗を数える。

